
スライムがチートバグで何が悪い？

即席兵器

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

スライムがチートバグで何が悪い？

【Nコード】

N82100

【作者名】

即席兵器

【あらすじ】

スライム（DQじゃないよ）のくせにチートバグ・・・
そんな記憶喪失で異世界に飛ばされた者の愉快（嘘付け）？いや痛快（嘘付け）？それともへんてこ（これが正解）？ファンタジー、なんとなく発信！

略称はスラバグでお願いしますm(´▽｀)m　そして感想お待ちしております。

そして5000PV越え&1000ユニーク・・・感謝感謝です。

始まりは凍死とともに

ポヨン・・・ポヨン・・・ポヨン・・・

「・・・なんでこうなった・・・ハア・・・」

そんなことを呟くのは、現「スライム」で元「人間」である記憶喪失な??君。

一言で彼の状態を言ってしまうと、所轄「転生」や「憑依」といったミラクルでファンタジーな状態なのである。

当たり前の話なのだが、一般?人であった彼からしてみればこの状況は異常すぎて訳が解らない、いや解れるわけがない。

それは至極当然のことであり、あえて言うならパニックを起こさずにここまで冷静でいられるのが凄いくらいなのだ。

「小説なんかで読んでもることにや面白いんだがよ、現実起こると迷惑極まりねえ・・・それに、普通こういうのはさ、神様とか思念体とかそういうなんか人類を超越した存在に、こう面会?でもしてさチート能力なりなんなり貰うのが普通だろ?いや、正直これでも「ドラゴン」とかなら納得したぜ?なのによお、なんでいきなり飛ばされて、そのくせに自分が成ったのがよお・・・「スライム」なんだあ!??」

いうことごとくもつともである、ご愁傷様・・・
しかし、なってしまったものは今更変えられない、いや変わると困る(主に作者が)。

あきらめろ、??君、そして「スライム」生活を満喫するんだ!
という訳で、彼のおぼろげな記憶の中を回想してみよう・・・

〈回想開始〉

「寒い・・・さすがに氷点下23 は寒いっ！」

彼はその時真冬の南極大陸にいた、なぜかは解らない・・・

「おいっ、??早く小屋に入れ！凍え死んじめえぞ！」

??とは彼の名前なのだが、なぜか思い出せない

「すつすいまえん・・・ふえくしゅっ！」

「おいおい・・・???本当になんでこんな仕事場選んだんだよ。」

「先輩・・・今時、仕事がるだけでも嬉しいんですよ。それで後先考えずに応募しちゃって・・・」

「・・・よくそれで通ったな、おい」

先輩と呼ばれている人はどこからとも無くコーヒーを取り出し???
に渡す

「先輩・・・」

「ん?なんだ?礼ならいらんぞ」

「違います・・・コレ凍ってますよ、もう」

「・・・」

「??・・・すまん」

「いえ、どうも。先輩は「あったかい」を買ったんでしょ?」

「ああ、すまん。今度は薬缶で暖めながら持つてくる」

正直、80のコーヒーが5分で凍るなんて異常もいいところである

「あつ、先輩自分は仕事も少ししてから帰ります!」

「おう、死なない程度に頑張れよ」

だがこの判断が彼、いや??にとっての最悪にして最後のミスであった……

結果、彼は凍死しとく解らないうちに「ここ」に飛ばされ、あげくのはて記憶喪失にまでなってしまったのである。

〈回想終了〉

「……だからって、なんでスライムなんだか……はあ、謎だ」
そんな記憶喪失君、もとい??のゆるゆる旅がここ「大陸」にて始まったのであった。

「うっはどっだい？」

「やあ、俺だ、スライムだ。」

「前話でなぜか自分の名前だけわからない状態でこの謎世界に飛ばされちまった不運な元人間のスライムだ。」

「当然、名前はまだ無い。」

「いや、もうこれからもずっとスライムと名乗ることにした。」

「まあ、そんなことは置いて・・・」

「YES、まず今の状況をさらっと確認しよう。」

「まず目の前に間違いなく2Mはある狼っぽいのが十匹前後、さらに後ろには5M越えの猪もどき一匹、上方は3M級の鷹か？が三匹で編隊飛行・・・」

「うん、なんだこりやああああ！」

「いわゆる、危機一髪だな！」

「ぜ、全然、嬉しくなんか無いんだからね！
つてツンデレじゃねえ、むしろ最悪だよ！」

「ニジリニジリ・・・」

「ダッ！」

「あ、ちよつと待て俺は美味しくないぞ！」

「だから齧ろうとするなっ！」

「「がぶっ」」

「痛い痛い、だから痛いって！」

「スライムだから（弾力性があるから）そこまでじゃないが、痛いものはやっぱり痛い！」

「「ドゴッ」」

「あっ、猪もどきも押すな押すな、そして突くなっ！」

「ブチッ」

つて鷹もかよチクチクするって！

あゝ！ナニオスルー！おたすけ！

．．．．．ぜえぜえ．．．死ぬかと思っ．．．た．．．また死ぬのはかん．．．べん．．．

にしても、興味本位で人を齧るなよ！

あつ、俺もう人じゃねえ．．．スライムだ．．．

そんなことは置いといて（置いといていいのか？）危機は去ったのだが、これからどうすれば良いのだから．．．

よくある小説のようにチート能力が俺に有れば、と今、本気で俺は思ってたよ？

なんかチート能力ねえのかな、っと思ってた時期もありました。

だが、なんとし！

しばらくズルズル移動すること約四時間、て長いわ！

と、とにかく、なんと真新しい人の足跡がっ！

もう他に手がかりの無かった俺は全力でそれを追跡したさ、だが問題なのはその後だった。

なにこのやたら大きい街？

それもなぜか衛生面とかが現代に近いレベルで進んでるよ？

ご都合主義ってやつか？作者いいかげんだな。

まあいい。とにかく入ってみよ

「不法侵入者感知！不法侵入者感知！アラートLv.1！アラートLv.1！繰り返します！不法侵入者感知！アラートLv.5！各員第三種戦闘配備に付け！」

はあ！？

もしかしてそれは俺のことか！？

「対象は小型モンスター！分類不能系不定形型亜種と推測されます！最寄班はすぐに駆けつけてください！対象コード：アンノウン（不明）！」

・・・それって十中八九俺じゃねえか！

まずい、まずいぞ！

なんでまた、「ききつ、いっぱつ！」（某CMのファイト）、イツパツ！風に）なんだよ！？

本気で嬉しくねーよ！

ぞぞっ！ぞぞっ！ぞっ！ぞっ！

どうする俺！どうする！？

どンドン足音が迫ってくるぞ、どうするんだ俺！

すらいむ：コマンド

逃亡 戦闘 謝罪 自棄

どうする、俺！

って！？ちょもう、来やがったー！早すぎるって！

「こちら第四班！目的のコード：アンノウンを発見しのじゃ。駆除を・・・開始する」

ええー！

いきなりで交渉もなしですかっ！

ってよく考えたら、俺はモンスターじゃねえか・・・

こ、こつなつたら・・・おし、命乞いだ！

プライド？何それ？それがあれば生きれるの？ってな話だ。

「ちょ、ちよつと待ってくれ！俺は悪いスライムなんかじゃねえ！

善良な(？)一般(？)スライムだ！頼む！命だけは、命だけは助けてくれえ！」

しゅしゅん……

……なんだこの沈黙は？

あれ、ミスツタ！？

いやだ、また死ぬなんていや、逃げ

「おい、スライム。お主……喋れるのか？」

「あ、ああ。」

……だからなんなんだ！

何？もしかして対応違うの？

喋る奴は希少価値だから解剖……とかじゃねえことを全力で祈るぜ……

「(小声で)こちら第四班じゃ。接触したアンノウンはスライムと名乗っておる。ああ、おそらく、いや間違いなく意思疎通が可能な高度知性生命体じゃ。どうするのじゃ？……そうか確かに、高度知性生命体の自由権はこの国では……ああ、それに……」

なんだ？高度知性生命体？自由権？

「それに分類不能系不定形型の高度知性生命体は……ああ、了解したのじゃ。」

ん？なんか終わったみたいだな……ああ、俺死ぬのか……なるほど珍しいから解剖パターンか……ハハハ……

「おし、覚悟は決まった、せめて一撃で楽に逝かせてくれ……」

「何を言っておるんじゃ？」

「え？もしかして言葉伝わってない？」

「イヤ、聞こえておるが……何故わしがお主を殺さねばならんのか？お主は保護と決まったのじゃが？」

「へ？」

それ、どゆこと？

「む、とにかくスライムとやら、すまなかったのじゃ。こちらの上層部の決定でこの国での永住権の委託が決まったのじゃが、どうじや？この国に住まないかの？」

「……！！？」

「はあ！？さっきまで俺の命狙ってたよね！？どゆこと！？それに永住権だ！？」

「あゝ、すまんそれはおいおい説明するとしてじゃ、だん「今、説明しろよ、てかしてくれ」無理じゃ、込み入った話になるのでわたしでは説明できんのじゃ。」

「……なんだそれ？ひどくないかそれ？」

「……じゃあ少なくとも、俺は命は狙われなくて済むんだよな？」

「ああ、それは保障するのじゃ。」

「食事は？人生じゃなくてスライム生の基本の食事はどうなるんだよ？」

「よつほどの量でなければしばらくの間はこちらで用意するのとこのじゃ。」

ほうほう、なかなかいい条件だな。あれ？そういえば自分ってどうやって食うんだ？……今は気にしないでおこう。

それはそうと、好条件過ぎる……もしや……罠？

「ちょっと待て、なんでそんな好条件をだしてまで俺なんかを保護しようとする。仮にも俺はモンスターなんだぜ？」

「たしかにそうじゃ。しかし、お主は高度な知性を持っておる個体じゃ。衝動だけで襲ったりするよう場かな事をしでかすやつではないじゃろう？」

それは確かにそうだ、俺は人を襲うつもりなんて欠片も無い。

「ただ、それにしたっておかしい、おかし過ぎる。」

「さっき言ったことはあくまで「保護する」ことに対する理由にしかならねえ。」

「おいおい、俺はなぜ「好条件」をだしてまで保護しようとするのかを聞いてんだ。さっきの理由付けは「保護する」事に対する説明でしかないんだがなあ？」

「む、困ったのう・・・これ以上は今の立場関係のままでは守秘義務で教えられんのじゃ。」

「ならそっちの保護下に入ると言ったら？これなら良いんじゃないのかよ？」

「た、確かにそうとも言えはそうなのじゃが・・・むむむう。」

「まあ、これ以上言い合っても何も進展しそくに無いし無駄だろう、というか危険だ。」

「今でこそ強気にでてる俺だが、それはあくまで相手が「モンスター」である俺を積極的に排除しようとしてこねえからであって、気が変わってこいつが俺を排除しようとしたが最後、一瞬で決着がつく・・・」

「まあ、当然に俺の「死」という形で、な。なら、」

「奇襲に出る、そう急に好意的に接するという形で。」

「で、俺はどうしたらいいんだ？」

「ほ？」

「いや、だからな？保護下に入るにはどうしたら良いんだよ、俺は？」

「あ、ああ。まずは登録局に来てもらって申請、その後にの、召集令状が出ておるのでな「委員会」に出席してもらおうのじゃ。」

「委員会？」

「委員会てなんだ？」

「む、委員会は知らぬわな・・・うむ、委員会とは、この国の中で両院とも二年に一回ずつ選ばれるもの達で構成される「国务院」の

中の代表者の集まりのことだ。」

なるほどこの国は両院制で内閣のようなものであるのか。

「ん〜なんとなくは解った。で後、その申請が終わって出席？も終
わったら、俺は自由にしていいのか？」

「それは問題ない・・・はず」

「はず!?!?・・・まあいい出席するぜ。さっさと申請とやらを済ま
せようぜ〜」

う〜う〜

「戦闘態勢解除、戦闘態勢解除、各班持ち場に戻ってください。繰
り返します・・・」

あ、そういえば解除の知らせ出て無かったもんな。

所変わり「委員会」

「今回の侵入者「コード：アンノウン」は高度知性生命体で友好的
つと、問題なしだな。」

「にしてもまさかあのタイプの知性体とわな・・・」

「委員長の持論が大当たりでしたね〜」

「そうですね。「無機的高度知性体論」、まさかこのような形で
立証されるとわかってなかったのでは？委員長？」

「・・・」

「何も語らず、ですか」

「ふふふ、面白いのだといいいのですが・・・」

「なんか、むずがゆいような感覚が？」

「どうしたスライム？」

「いやなんでもな・・・い？」

委員会とモノリスとスライムと・・・

やあ、俺だ。

おなじみのスライムだ。

今、申請局？だったかな？ちがった、登録局で入国&永住の関係書類を片付けているんだが・・・
多いな、しゃれにらんぐらい多い。

なんだ？あれか？これが俗に言う「書類地獄」ってやつか？
カキカキカキカキ・・・

そのだな、もう20枚を超えたはずなんだがな、さつきからガゼル（前話の第四班の方）がどんどん持つてくるんだわ。

「おい、ガゼルよお、これ後何枚くらいあんるんだ？」

「・・・詳しくは解らぬが、わしの見た限りではまだ30枚はあるな。」

・・・30枚デスカ？

「・・・嬉しくねえ情報をありがとう・・・」

「お前が聞いたのだろうがっ！」

もうひたすら書類と格闘すること約一時間！

やっとこさつとこ72枚の申請書類を書き上げた俺だが、もう達成感が半端じゃない！

「ふ・・・ふはははあああああ、げほっげほお、終わったっ！」

「はしゃいでいるところに申し訳ないが・・・スライム、書類は処理しきつたが「委員会」への出席がまだ終わっておらんぞ？」

「ああああ・・・完っ全に忘れてたぜ・・・」

所変わり委員会

「……」

「……」

「……ねえ、なにこの沈黙。怖いんですけど。」

「……ああ、委員長がさつきからずっと黙り込んでいるから自然と皆さんも黙ってしまっただんでしょねえ。」

「にしても委員長はどうして今日に限ってここまで何も喋らないのかね？」

「「「さあ？」「」」

ズルズル……

「のう、スライムよ？」

「ああ？なんだ？」

「今から委員会の元へ、ようは国家の最高権力の元へと行くのだというのに、スライムは緊張などはせんのか？」

「するわけないだろうが。ってかしても何にもならねえからな。」

「そうか……普通、緊張なりするものだと思うのだがのう……」

やあ、スライムだが、もう10分くらい移動し続けているはずなんだが……

まだ、「委員会」とやらの所には到着しないんだよな、いや本当に正直、どれだけ広いんだよこの施設……

「なあ、ガゼル、委員会の会議室？だっけ？まで後どれくらいで到着するんだよ？もうかれこれ10分くらい移動し続けているんだがなあ？」

「うむ……もう少しで到着のはずだ……タブン。ここの角を曲がった先に……おお！あった、あったぞスライム！」

……もしかしてガゼルは……ここに来たの初めなんじゃ？

ウィーン……ドゴンッ、ドゴンッ

「第四班班長、ガゼル＝レノシアです！ご用命のスライムを連れて

きました！」

「・・・お入りなさい・・・」

「はっ！」

「ういゝす」

なんだこの暗室・・・

どこの人類補○計画委○会だよ・・・

つてかマジで小さいモノリス（横10cm縦16cm幅2cmぐらい）が一つだけだが、議長席みたいなの（ようは正面）所にいるし・・・

「まずだな、スライムとやらに謝罪したい・・・今回の攻撃、まことに申し訳なかった。完全にこちら側のミスありそちらには全く非が無い。ついては保証「いやいや、それはいいよ。ただ気になるんだが・・・そのモノリス何？」

「ああ、紹介しておりませんでしたな。こちらの方は委員会議長のモノリス。」

「へへ、つてやっぱりかい・・・で、なんでモノリスなんか議長なんて重役やってんの？正直わけが解らんのだけでもよ。」

「ば、馬鹿か！スライム！仮にも最高権力である委員会議長の前で

『ヨイ、キニスルナ』へ・・・？」

なんださっきの、神経に、脳に、直接響くような感覚は・・・まさか、いわゆるテレキネシスか？

「議長、聞いておられたのですか・・・ガゼル班長下がりなさい、議長がこれから自ら説明するゆえ、しばし待ちなさい。」

「・・・はっ！」

『ワタシガ、ギチヨウノ、モノリスダ。スライムトヤラヨ、オヌシガシリタイノハ、ナゼワタシガギチヨウナドヲ、シテイルカデアロウ？』

「おお、そのとうりだぜ。話してくれるんだよな。」

『モチロンダ。ワタシガギチヨウヤツテイルリユウハ、トテモタンジュンナコトナノダ、ワタシガ、モノリス、バンニンダカラダ。ソレダケダ。』

「・・・要するに、すまんわけ解らん・・・」

『フフフ・・・キニスルナ、マア、ソロソロジユウニサシテモラウヨテイダガナ。シゴトツメノセイカツハイイカゲンヤメタイ』
ふむ、そろそろ自由に・・・か・・・

「なら俺と一緒にのんびりしねえか？少なくとも委員会議長なんかよかは面白いと思うぜ？なんたって「怪奇！喋るスライム」だからな！」

『タシカニ、オモシロソウダナ・・・カンガエテオク。』

「それはそうとなんか質問とかねえのか？」

「・・・ああ、そうでしたね。聞きたいのはあなたが何者なのかなんですか？」

「・・・北極アルバイトとか先輩とかのことは言わない方がいいか？だって、これ転生だよなあ・・・間違いなく頭のおかしい奴扱いになるよな・・・」

うん、言わないでおこう。そのほうが身のため？だ。

なら、現状を隠さず話すべきだな。よし。

「俺はスライム。それ以上でも以下でもねえ。どこまで行っても、ただそれだけだ。」

つて、無駄にかっこつけちまったあ！

「まあそんなところだろうと思っていましたよ。」

「スライムう、正論だのう。だが若干恥ずかしいぞ、その台詞は。」
『フフフ・・・ワタシトオナジヨウナモノカ。』

「それはそうとスライム殿、これからお主の能力を調べつくしたいと思うのだが・・・よろしいかね？」

笑顔が怖いぜ・・・あんた間違ひなくマッドサイエンティストだな。それでも自分の現状は知りたいしな・・・まあ、OKするか。

「いいぜ。でどうするんだ？」

「よし！皆のもの測定器を用意しろ！」

・・・ガラガラガラガラ

なんか運ばれてきたが、コレが測定器なのか？

「スライム殿、その台に乗っていただけませんか？その後の準備はこちらでさせていただきますので、お願いしますよ。」

「おお、了解だ。よつと、おい乗ったぜ！」

ん？なんだ変なパッドみたいなのが俺に取り付けられてくな・・・

「しばし、お待ちを・・・出来ました。ああ、それと測定の瞬間、若干の刺激が発生しますが、我慢してください・・・」

「あ、ああ？解ったぜ。」

ぶうーん・・・ジジジジ・・・

「stand by, ready, Go！」

なぜ英語っ!？

ドゴンツ・・・

「つて、イター!？」

「・・・データを検出中ですの、しばしお待ちを・・・」

「さつきもしばしお待ちをついてたが・・・ま、そんなことはいいんだが、いてええ・・・なんだ？あの痛さは？注射針も天国に思えるぐらい痛かったんだが？」

いや、本当に、＜本気＞と書いて、＜マジ＞と読むぐらいに。

「ああ、出ました・・・つて、ん？なんです、これは？・・・つ見たことの無いなデータですね!？おい！すぐに複製して研究班に回せ！早急に、だ！後、スライム殿を逃げないように拘束しろっ！」

「　　はっ!」「　　」

なんだ？どうした？なんか拘束とか聞こえた気が

「申し訳ございませんが、命令につき拘束させていただきます。」
え！？ちよ！？

「おいしい！いつたいなんなんだ！・・・結局どうなったんだよ！？」

「ああ、えーとそれが・・・ええいつもうめんどくさい！説明は投げたっ！」

データファイルナンバー：0023997186

種族：

??（不明）

基礎規模：

0（不明）

能力：

膂力 魔力 気力 耐久E× 隠密E×

固有能力：

PD『情報制御』

PD『神託細胞』

はあ？隠密性？

それもなしてFate風？

なんじゃそりゃ！としかいえねえ・・・

それも攻撃力皆無じゃねえか！それも魔力・気力（無し）ってことはファンタジーパワーな術とかが使えねえってことか！？

「何・・・じゃ・・・こりゃーーーーー！」

「それは、こつちが聞きたいぐらいですって！普通は、本来体力が表示されるはずなのになぜか「基礎規模」という謎の情報として扱われて・・・それに、なぜか膂力・魔力・気力、そういう基本ステータスが表示されない！その癖になんで、なんで耐久だけ「E×」判定なんですか！？・・・なんてこつた前代未聞もいいところですよ

っ！だれか、説明 please! help me!」
壊れたっ！じゃなくて・・・

「それぐらい俺だっつて解るって！そじゃなくて、何で（無し）扱
いなんだよ！」

『フフフ・・・スライム、オマエハヤハリオモシロイ・・・』
おいっ・・・

「しかし・・・実際問題、スライムのやつは移動等ができておる。
なのになぜ膂力が無いのじゃ？」

あっ、こいつ・・・敬語捨てやがった・・・

「・・・本当だ（ですね）」

「でも、魔力・気力は無いんでしょうね（笑）」

「おまつ笑いやがったな！？俺が気にしているところをおお！」

「でも二つも「固有能力」を持つてるじゃないですか。私は『高速
事務』しか持っていませんからそれこそ羨ましいぐらいですよ？」
ん？固有能力？

「ちよつと待ってくれ、固有能力てなんだ？」

・・・（沈黙）

あれ？俺なんか不味い事聞いたか？

「スライム、お主・・・しらんのか？」

えっ？もしかして一般常識クラスのことだったのか！？

「いやでも、モンスターだぜ？俺・・・」

「それもそうじゃが・・・」

「っと、そうですね。なんですからこの場で説明しておきましょう
か。」

「おおっ、頼むぜ。」

「ええ、まず固有能力とは名前のとおり「それぞれが固有に持つ能
力」です。といっても全てが固有能力を持っているわけではありま

せん。それどころか持っているものの方が遙かに少ないのが現実です。ですから現状で二つも保有しているスライム殿はやはり異常です。ちなみにですが固有能力の取得は「生まれつき取得しているもの」・「修行などにより取得するもの」・「精霊等の加護等により取得するもの」等といくつかのタイプがあります。さらに効果についてですが、「常時発動」のものと「任意発動」のものがあり、『高速事務』は「常時発動」の固有能力で、スライム殿の『情報制御』は「任意発動」ですね。もつと深く言わせて貰いますと、固有能力には階位が存在しており、PDバンドラ>YUユーク>REレア>NOノイマルとなっています。スライム殿のスキルはどれも最高位のPD級ですから、本気で運命を呪うレベルで凄い能力です・・・」

「おい、最後なんか殺意を感じたぞ！」

「ああ、そうなのか・・・」

「後、わしは『高速思考』と『兵器操作』と『応急医療』を持って
おる。」

「ってお前、三つも持ってんじゃねーか！」

「いやどれもNO級じゃし。」

『ソウイェバ、ワタシハ「議長のはもう考えたくなくなるレベルの固有能力ですから言わなくていいですよ（黒笑）」ハイ・・・』

スライム宅は遠くて

よお、俺だ、スライムだ。

なんというか、よく解らない自分の能力をデータとして突きつけられて少し困っているスライムだ。

委員会から解放された後、俺は郊外に設置されているという俺のその「俺の」マイホームに向かって移動している途中なんだが・・・前回はいつたがな、この街はだな・・・やたらと広い！

今回はかれこれ1時間以上ズルズルとガゼルとともに走っているんだがまだ到着しないんだぜ・・・
遠いな・・・

「ガゼルよお・・・」

「なんだスライム、ぜっ・・・疲れたとかいいださないな？」

「いんや、そんなことは無いんだがよ、遠すぎねえか？」

「ぜっ！ぜえ・・・お前が！ぜっ・・・静かな！郊外の！地下付！ぜっ・・・

・一戸建てが欲しいなんて言ったせいだろうつというのに！」

え？俺のせいだよ・・・

「まったく、スライム！ぜっ・・・お前が条件に！郊外なんて入れなかつたら！ぜっ・・・もう少しマシだったはずだというのにじゃ・・・

！」

そんなこと言われてもな

ほら？なんか静かな郊外でのんびりしたいじゃん？

「知るかつ！」

おおっう、心の声が読まれてるのか？

「まあまあガゼル、それはそうと後、どれくらいで到着するんだ？」

「・・・後、10分くらいじゃな・・・」

「なら頑張って走れ！スピードアップ！」

「鬼！悪魔！だいたいなんでわしがお前を運ばねばならんのじゃっ
！」

実は、スライムは何もせずガゼルに運んでもらっている状態なのだ。
「それは俺に言うなよ・・・あえてのモノリスに言え。」

「第一、な・ん・で！モノリス様は何の手配もしてくれなかったの
じゃ！予算はあるだろうにつ・・・」

「それこそ俺の知ったことか！」

それから約十五分後・・・

「おお～到着、到着～」

「お・・・い・・・こ・・・（訳：お前、いつか殺してやる・・・）」
物騒だな、おい
てか、殺せねえよ

「にしても、凄いな・・・いや凄すぎるな・・・」

敷地的には広いが、家本隊は少し大きめの小屋ぐらい、だが、問題
はそけではなかった。

そこにあつたのはこちらでいうところの

「自家発電装備」（埋め込み）四基に「レーザセンサー」（カモフ
ラージュ済み）多数

果ては、自動迎撃装置（現在はOFF）、特殊重戦車（何に使うん
だ）、射撃場、etc...

どこをどう見たって、戦うことというより訓練もだが、まあそっ
うことを前提条件に入れたであろう設備、装備ばかりであった・・・

「・・・なあ、ガゼルよお。これはいつたい・・・」

「げほっげほげほ、（復活した）なんじゃ？（怒）」

「俺のうちはどこと戦争でもするつもりなんだよ？なあ？」

「うむう・・・む、戦車なら貰うぞ?というか買わせてくれんかの?」

「絶対に戦車は、いや戦車だけはやらん!」

「なぜじゃ!普通戦車が一番いらんじゃろうが?」

「それは戦車は俺の史上最高のお『浪漫』だからだつ!」

「知るかああああ!どうでもいいのじゃ!」

「安全性抜群!多曲面複合装甲+内燃爆発緩衝機構!二連装大経口主砲+軽量小経口機関銃四門!さらにリアクティブリニアシート!とどめに多重サスペンション+多局面仕様コーティング!これなら単機で無双も夢じゃないぜ!水も砂も低温も高温もゴジラ(?)もモスラ(?)もドンと来いつてな、スペックだぜ!さすが異世界!」
実はスライムは前世ではかなりのミリタリー(というより軍事技術)オタクだったのでこのバグスペックぶりにものすごく感動しているのである。

「なおさら渡しやがれなのじゃ!スライムう!いや、殺してでも奪い取るぞ!」

「ざけんなあ、これはどこまでいっても俺のものだ!返り討ちにしてくれるわっ!」

「俺が(わしが)この戦車の真の主(持ち主)だ(じゃ)!!!」

しばしの間お待ちください・・・

チュドーン!

「お前つ!そ・・・れを使つ・・・うのは無しじゃろ!」

「ふはははは!我が家の技術は世界一いい!卑怯?知るか、我が目の前にあるのは勝利のみい!」

ズダダダダッ!

「ちよ、まっ、のおわああ!」

ドガン！

・・・

「ここで戦ったのが運のつきだったな、ガゼル。ふあっははははははあ！」

「く・・・い・・・う・・・ば・・・（訳：くそう、いつか奪い取ってやる・・・）」バタッ

そのころ委員会・・・

『フッフ、ササヤカナオクリモノダツタガハタシテドウナツタヤラマア、ケツカハミエテイルガナ。』

「にしてもこの異常としか言えないデータどうにかありませんかね？」

「再測定の後、再検討をしよう。それだけでも情報の整理ぐらいにはなるはずだからな」

「委員長！あなたはどう思います？」

『ヒサカタブリノ、「タビビト」カ？』

「・・・「タビビト」ですか。」

「1200年ぶりの「タビビト」・・・もしそうだとすれば・・・はたして、「何故、旅を渡ることになったか」」

「そう、「タビビトはセカイをワタル」このキーワード」

「「「「「我等委員会、知識のあるべき姿の探求者。」」「」「」

「ゆえに」

「深くあれ」

「ゆえに」

「聴くあれ」

「ゆえに」

「広くあれ」

『コンゲンノチシキココニアレ』

「忘れるな3000年の研鑽、3000年の記録、我等は観察者」

「ここに全てを集め、モノリスに全てを刻む」

「ム、ナンデワタシがキロクセネバナライノダ」

「そこは、ねえ？こうノリで言ったというか」

「なんで、こんな謎っぽい台詞を言ってるんですか？」

「ふっ、カッコいいからさ！」

「それは違うでしょ（だろ）」

舞台は戻りスライム宅・・・

「くくく、戦車万歳・・・」

まだこんな調子のミリタリーオタクなスライムなのであった。

スライム宅は遠くて(後書き)

次話：スライム宅内を探検！そして暗躍しそうでしない委員会！
乞うご期待！

episode 諸設定一覧(前書き)

という訳で今までの話episodeの諸設定です。

episode 諸設定一覧

登場人物一覧（不完全）

スライム

本名：スライム（解らない）

種族：スライム？（暫定的に決定）

色：クリア（透明色）

一人称：俺（先輩など目上の人に対しては自分）

先輩

本名：武永たけなが 暁あきら

種族：人間（日本人）

一人称：俺

ガゼル

本名：ガゼル＝レノシア（日本式ならレノシア・ガゼル）

種族：人間（ノルム族）

一人称：わし（一応女性）

ガゼルの部下その1

本名：クセン＝ロウ（日本式ならロウ・クセン）

種族：人間（レスタン族）

一人称：わたし

モノリス

本名：モノリス（それ以上でも以下でもない）

種族：セフィロトス・モノリス

色：黒ベース一部赤

一人称：ワタシ

委員会の議員1

本名：パーシアススレイル（スレイル・パーシア）

種族：人間（クrow族）

委員会の議員2

本名：アデレイド・フォン・アキレウス（アキレウス・アデレイド）

種族：人間（シノウ族）

補則設定（不完全）

『ゲオルギア大陸』

地球のパンゲア大陸の約三分の二ほどの大きさを持つ大陸

中央に巨大な山脈『カプレオス山脈』があり一部は資源採掘地帯になっっているが、その危険さ（モンスター：ドラゴン種やら根本的な地形の険しさや謎の病原体やら）ゆえあくまで極小域のみ開発されているのが現状。

主人公が出現したのはその中でも北の最果て『エルドラド民主主義共和国：本国』領の奥地にあり、かなりの危険地帯（『カプレオス山脈からすればまだマシ』）に分類される『ゲイヒユウの森』（一般市民は自殺志願者以外まず立ち寄らない）の中央部。

『エルドラド民主主義共和国』

大陸内最高の科学（魔法科学）力を持つ国家であり『本国』『南方

分国』 『西方分国』 『東方分国』 『中央分国』 の五国が飛び地状態であるある意味大国である。

その中でも『本国』の魔法科学分野の進み具合は凄まじく、他国の学者からは「20年先行くクオリティ」と羨ましがられている。

『中央分国』は、山脈に面しており数少ない資源採掘地域を持つ国である。そのせいで攻め込まれることも多かった。

『西方分国』 『東方分国』はそのうち話に絡んできます。

『南方分国』は、大陸外との連絡が取れる唯一の国家であり貿易が盛ん。ただ、『中央分国』同様、攻め込まれることが多かった。

ちなみに、個々の分国はさほど大きくなく良くて「中堅国家」ぐらいの規模であり、本国では評議会内の二院制の評議で法律などが決められる。

『カプレオス山脈』

地方の言い伝えでは、「おおきな竜がこの地にて命落とし、残りし亡骸を中心に山脈が出来た」と語り継がれているが真偽の程は謎である。

超大規模な資源地帯であるが、前記のとうり実際に採掘をしている所はとても少ない。

「モンスター：ドラゴン種」などしゃれにならないレベルの「絶対強者」が多数生息。正直言って小国ならそれらを「一匹」片付けるだけで予算いっぱい消費してしまう位の化け物っぷり。(

正直、スライムとどっちがチート？と聞かれたら、間違いなくコッチ)

他にも謎の「奇病」や険しい山肌、正体不明の自立機動兵器など、異常なほどの「チートバグの詰め合わせ」っぷり。

言い表すなら「無理ゲー仕様チートバグ詰め合わせダンジョン」といったところか・・・

「ここはやっぱり不思議世界（前書き）」

ふふふ、ひさしぶりの更新ですよ！
本当に申し訳ありませんでした！

「ここはやっぱり不思議世界」

家をゲットしてから早一月・・・

やあ、いつもど通りの俺だよ
ようするにスライムだ。

「お主もよく飽きんの〜その挨拶方、いい加減変えたらどうじゃ？」

「モノローグ読むなよ・・・」

「読心は必須技術^{ギヤグ}じゃぞ？」

「（ ）の中いらなくね？っていうか、なんで平然とさあ人の家の中にいるわけ!？」

「お主の家はわしの家、わしの家はわしの家。これ世界の摂理なり・・・じゃ。」

「かつこいいこと言ってるように聞こえるけどそれただのジャイア
ニズムじゃねーか!こんちくしょう!」

「わしは畜生ではないぞ。あくまで人間じゃ。という分類学てきに
いえばお主が畜生じゃぞ？」

「だれが、うまいこと言えっつていったし!？」

たしかに畜生だよ!?!文句あつか?こんにゃろっ!

「ちなみに言うんじゃが、わしは女だから野郎でもないぞ。」

「冷静に突っ込みつつお茶飲むとかどんだけ！？ってまたモノロ
グをおおおお！」

「まあ、落ち着くのじゃ・・・ほれお茶。」

気が利くな・・・ありがたく貰っておくか。

「ありがとう・・・って、おい！これ茶じゃねえ！青汁じゃねえ、
ゲッホマズッ！」

「馬鹿じゃのお、一気に全部の飲むとは・・・」

「う、こいつ・・・」

「ほれ、今度こそちゃんとお茶じゃ。」

「ほんとに茶だろうな？」

「うむ、今度こそ、正真正銘最高品質のお茶じゃ！」

「む、たしかに旨い。」

ズズッ・・・

「で、結局なんで家にきたんだよ？まさか本気でジャイアニズム・
・なんてことはないよな？」

「うむ、実を言うとな・・・寮を追い出されての・・・」

・・・はあ？

「はあ？すまん、意味がわからん。」

「いや、それがの、恥ずかしい話なんじゃが家賃を滞納しとったのじゃ・・・」

それって、強制退寮ってやつか？それよか、なぜに家賃滞納？

「まで、まずなんで家賃を滞納していた？たしかお前は警備隊に所属していて隊長だったよな？それなりに給料貰ってるんじゃないかねえのか？」

「・・・(汗)」

「おい・・・なにか気まずいことでもあるのか？」

「・・・(汗)」

「おい、反応しろい。」

「・・・はあ・・・うう、非常に言いづらいのじゃが、食費に消えていったのじゃ・・・」

食費？までまで、どう考えても可笑しいだろう。

「食費い？お前、月給料幾ら貰ってた？」

「(小声で) 800000ノル(ノル=円ぐらい)・・・」

は、800000ノルう!?

「ちよつと待てえ!とんでもない大金じゃねえか!食費だけじゃ絶対消費し切れんわ!」

一日10000ノル分食事しても余裕で余る計算だぞ?普通にありえん。

「ううう、事実食費で消えてるのじゃ・・・」

「どうやったらそんな大金を消費仕切れるんだ!?!」

「わしは200000ノル分しか食べていないのじゃー、悪いのはノラのやつじゃ」

What?ノラ?なにそれ?

「ノラ?なんだそれ?」

「ほれ、今お主の後ろにいるやつじゃ。」

何そのメリーさんっぽい言い方?

「後ろお・・・(汗)」

ちよ、ちよつとまで・・・スウツハアスウツハア。オチ、オチツケよじ。

「もう一度・・・」

クルツ！

「グルウ、グルルガアアアアア！！」

ノー！ヤッパシイタ！タスケテ！

「グラア！」

ガブツ！

「え！ちよつと！？食べようとししないで！？」

やばい！これ俺死んだ！

「うぬ、ノラよ威嚇するでない。こやつは敵ではない。」

ベシイ！

『グウ、わ、分かりましたよ・・・だから主そんな目で見ないでください！』

しゃべ・・・た？

「おおう、喋った！竜が！」

『いや、私からすればスライムが喋ることの方が驚きなんですけど・・・』

たしかにモンスターで喋るっていったら竜とかだもんなあ・・・い

いなあドラゴン……

『それも私のようなテレパシー的意思疎通法ではなく、あなたは実際に声を出していますからなお驚きです。』

「ん？たしかにモノリスのテレパスに感じ似てるな。なるほどなるほど。」

『え？モノリスと会ったことがあるのですか？』

「ん、ああ。えっと……」

「スライム、お主に一応言っておくが守秘義務があるぞ？」

「……さいか。」

『そういえば主とスライムはなんの話をしていたのですか？』

「「お前つめ（ノラよ）の食費の話」

『……すいません……』

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8210o/>

スライムがチートバグで何が悪い？

2011年4月16日20時04分発行